

## 産学連携のリアル

(連載第6回)

マクスウェル国際特許事務所  
弁理士 加島 広基

近年、大学等の研究教育機関における研究成果等の「知」を民間企業が活用し、新技術の研究開発や新事業の創出を図ることを目的として、産学連携の動きが加速している。また、首相官邸が設置する日本経済再生本部が出した「日本再興戦略2016」によれば、2025年度までに大学・国立研究開発法人等に対する企業の投資額の目標を現在の3倍とすることが挙げられている。

このように、最近では産学連携の推進を求める動きが活発になっているものの、両者の元々の常識や文化が大きく異なっていたため、必ずしも産学連携で大きな成果を生み出すことができない場合もある。とりわけ、知財面において両者の立場に大きな食い違いが生じるケースが多々見受けられる。

本連載では、産学連携の最前線に携わっている、研究教育機関側の立場の方および企業側の立場の方に交互にインタビューを行い、とりわけ知財面での問題やその解決手段についてリアルな声を聞くことにより、産学連携を成功させるヒントを探っていきたい。

連載第6回では、株式会社ユーグレナ執行役員（研究開発担当）の鈴木健吾氏に、大学発ベンチャーとして大学および企業の両方の視線を持つ立場から見た産学連携の成功の秘訣について話をうかがった。

### ミドリムシが世界を変える

—— 鈴木さんは大学在籍中からユーグレナ社長の出雲氏と二人三脚でミドリムシの研究開発に取り組まれてきたとお伺いしておりますが、ミドリムシを事業の中心としてユーグレナ社を立ち上げられた経緯等について教えてください。

**鈴木** ミドリムシと出会ったのは学生時代のことでした。大学に入学した後、世の中には生物を交えなければ分からないことがたくさんあると考えて農学部に進学しましたが、生物を通して社会に貢献したり、環境を改善したりできるような研究テーマを探すうちに、ミドリムシにたどり着きました。ひとつの細胞でひとつの生物として完結している単純化された美しさや、動物と植物の特徴を両方あわせ持つ特殊性にも魅了されましたが、なによりも、環境問題と食料問題をいっぺんに解決できる可能性を持っていることに、強い興味を抱きました。社長の出雲とは当時か



(株式会社ユーグレナ執行役員 (研究開発担当) 鈴木健吾氏)

ら知り合いだったのですが、出雲からは生まれた環境のせいで十分な栄養が得られずに適切な成長が阻害されている子どもたちの話を聞いておりました。大学に在籍中はそのまま研究者としての道を極めることも考えましたが、ミドリムシが世界を変えるには、その仕組みが具体的に社会実装されなければ意味がない。そのためには、学术界だけでなく一般社会からも必要とされる存在になりたいと考え、出雲らとともにユーグレナ社の立ち上げに参加することにしました。

——— 出雲社長の著書「僕はミドリムシで世界を救うことに決めました。」では、ミドリムシの大量培養技術を確立させるのに大変苦勞されたと書かれておりましたが、そのあたりの苦勞話をお伺いできますでしょうか。

**鈴木** 会社立ち上げにあたっての当初の課題は、ミドリムシを事業として成り立たせるために、これを大量に安定的に培養することでした。ミドリムシは栄養が豊富なので、他の生物にすぐ食べられてしまいます。ミドリムシだけを培養する方法を確立するのに最も苦勞しました。最初は耳かき一杯が限界だったのが、一度に両手で抱えきれない量のミドリムシ粉末を得られるようになったときは、とても大きな感慨を得ました。これは、各大学の研究者や、提携企業の協力なくしては達成できなかったことです。また、ミドリムシを使った商品がコンビニで取り扱われるようになったときは、とうとう流通に乗ってみんなの手元に届く日が来たんだと、また別の感動がありました。

## 大学および企業の両方の視線を持つ立場から見た産学連携

——— 鈴木さんは大学と企業の両方の立場を知っていますが、そのような立場から見て産学